

近年の梅雨入りと梅雨明け		
	梅雨入り	梅雨明け
平年	6月07日	7月19日
2024年	6月21日 (平年より14日遅い)	7月18日
2023年	6月08日 (1日遅)	7月22日
2022年	6月06日 (1日早)	7月23日
2021年	6月14日 (7日遅)	7月16日
2020年	6月11日 (4日遅)	8月01日
2019年	6月07日 (0日)	7月24日
2018年	6月06日 (1日早)	6月29日

お、西日本では6月27日に梅雨明けの発表がありました。

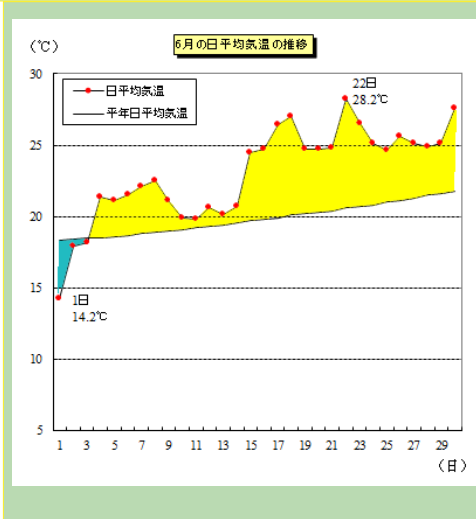
2025年の関東地方の梅雨入りは、平年より3日遅く、昨年より11日早い、6月10日頃でした。5月16日に九州南部からはじまり、梅雨のない北海道を除き、6月14日までに梅雨入りの発表がありました。(なお、西日本では6月27日に梅雨明けの発表がありました。)

ある町の
天気相談所

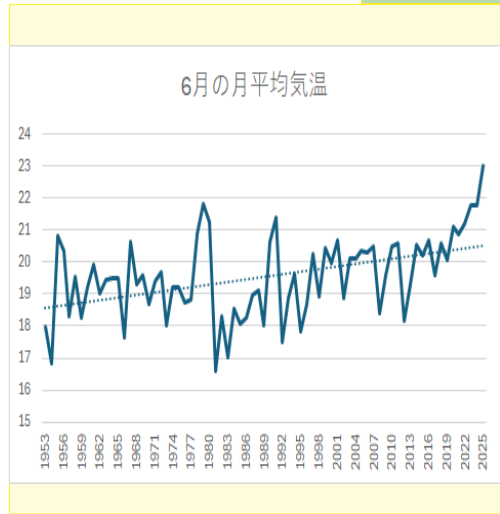
Vol.91 2025.07.04

令和7年7月号

太平洋高気圧に覆れやすいため、平年に比べ曇りや雨の日が少ない見込みです。平均気温は「高い」、降水量は「平年並みか少ない」、日照時間は「多い」となる見込みです。



6月は、本州の南に前線が停滞し、周期的に雨が降りましたが、高気圧に覆われ晴れる日が多くなりました。平年よりかなり高い気温となり6月の月平均気温は23・0度となり、最高気温平均、最低気温平均も含めて、これまでで最も高くなりました。雨の日は少なく、晴れた日が多かったため、月合計降水量は101・0ミリと平年の65パーセントと少なく、月合計日照時間は149・9時間と平年の122パーセントと多くなりました。



2025年の6月の月平均気温は23・0度と、これまでで最も高い気温となり、6月の夏日の日数(22日)はこれまでで最も多く、真夏日の日数(5日)は2番目に多くなりました。中旬頃から高気圧に覆われる日が続き、気温が高い日が多くなりました。

ここ最近では6月の平均気温は高い年が多くなっています。年により気温の差は大きいですが、月平均気温が21度を超えたのは2020年までは1979年1980年1991年の3回でしたが、2020年以降は2021年を除いた5回となっています。

最高気温が30度を超える平年の日数は1990年代は0・6日でしたが、現在は1・2日で、はじめて30度を超える日も6月下旬になっています。

大阪・関西万博が開催されていますが、筆者にとって唯一、行ったことがあるのは、1985年の科学万博です。県内で開催されましたが、当時は筑波まで遠く、小学校低学年であったことから、会場に行った記憶だけで、あまりパビリオンをみた記憶が残っておりません。なんとも残念なことです。ただ、空に浮いている水道の蛇口のオブジェの展示は、どうして浮いていて水が出てるんだろうと、不思議に思い、記憶に残っています。筆者にとって、科学万博はこの水道の蛇口です。

ただ、この蛇口のおかげで、理科好きになりました。

短時間強雨による浸水危険度の高まりを把握するための指標。地面の状態によって、雨水が貯まりにくかったり、地表面に貯まりやすい特徴がある。こうした地面の状況や地質、地形や勾配などを考慮して、降った雨が地表面にどれだけ貯まっているかを、タンクモデルを用いて数値化したもの。その地点での大雨警報等の判断基準は、過去の災害などをもとに計算されており、これと現在の値を比較することでその地点での、浸水発生危険度を判断できる。

(参考：気象庁ホームページ)

表面雨量指数

天気用語の基礎知識

……神峰の山から……